

新美南吉・青春日記

——1933年
東京外語時代

新美南吉
渡辺正男

新美南吉・青春日記

—— 1933年東京外語時代 ——

新美南吉 著
渡辺正男 編



新 美 南 吉 (にいみ・なんきち) 〈1913~1943〉

愛知県生まれ。児童文学者

渡 辺 正 男 (わたなべ・まさお) 〈1923~

東京生まれ。元中日新聞編集局校閲部次長

新美南吉・青春日記—1933 年東京外語時代— 定価 3,800 円

昭和 60 年 10 月 15 日印刷 昭和 60 年 10 月 20 日発行

著 者 新 美 南 吉

編 者 渡 辺 正 男

発行者 株式会社 明 治 書 院

代表者 三樹 彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明 治 書 院

東京都千代田区神田錦町 1 の 16 郵便番号 101

電話 (03) 292-3741 (代) 振替口座 東京 3—4991

©1985 新美南吉著作権管理委員会／渡辺正男

0095—26018—8305 高陽堂製本

凡 例

一、本書は、新美南吉の一九三三年（昭和八年）の日記の全文を翻刻したもので、原文は昭和七年十月五日発行の『文芸日記^{昭和八年}』（積善館）に一月一日から十二月三十一日まで書かれたものである。

二、この日記はB6判、一日一ページあて、一ページ十六行の縦罫入りの体裁で、各月の末尾には補遺ページ（二〜三ページ）がおかれている。

三、本書は、この日記を次の方針により、できる限り忠実に翻刻したものである。

- (1) 原文の和文には、縦書きのものと横書きのものとがあるが、すべて縦組みとした。
- (2) 原文では段間を一行あけたもの、二行以上にわたるものときまぎれだが、本書ではあきはすべて一行あきで示した。

(3) 原文の漢字や送りがな等の表記には、かなりの当て字・誤記・脱字などと思われるものも認められるが、これらには南吉特有の書き方と思われるものもあるので、一切訂正しなかった。ただし、

特殊なものにはママと傍書した。

○週期的（正しくは周期的）

○招介（正しくは紹介）

○偶然・遇然（正しくは偶然）

○甚だしく近いたので（正しくは……近づいた
ので）

○Orhym（正しくはrhyme）

○しろう乳銅（正しくはしろう乳洞）

○俺の塊（正しくは俺の魂）

(4) 人名や地名等の固有名詞の誤りはママと傍書したが、特殊なものには*印を傍書し、当該月の末尾に正誤表を示しておいた。

(5) 人名の表記は原文通りとしたが、都合により一部分をO、N等のイニシアルで示した場合もある。また、原文を些少削除した場合もある。

一、日記本文の後に「M教授の欠伸」を載せたが、これは日記の十二月二十一日に同創作についての記述があることから、両者の関連を知る好資料と考えて併載したものである。

目次

南吉日記——1933年東京外語時代	1
-------------------	---

M教授と欠伸（創作）	243
------------	-----

私の新美南吉	257
青春日記とその周辺——南吉日記解題	277

南吉日記

—— 1933年東京外語時代 ——

一月一日 日曜日

A happy new year to me!

Went to the forest of Smiyoshi shrine to hand my letter to O——, but she did not come.

Accompanied brother to cinema.

At night was invited to Mr. Ito's and had a good time. As to the religion, I and a teacher, Hayakawa by name, deputed with Mr. Ito.

一月二日 月曜日

Mother said that she saw O—— going somewhere by tramcar.

Was accompanied by brother to Nagoya by tramcar.

Visited Mr. Eguchi's, but he was absent from home. I saw books on the book-shells in his house.

Took lanch at Sakaeya ; then entered cinema palace and saw Keeton's 'Speak easily'.

Read through Gorikii's 'Mother'.

一月三日 火曜日

Fell in a slumber during study. Was awaken by a voice. It was Toshihiko Ino.

Went to see Hatanaka with him. Dwelled on such useless great things as fate, love, religion, art, and so on. And was entertained with dinner.

一月四日 水曜日

Have studied tolerably.

But I am going far from arts.

Afternoon went to see Kume ; but he was absent.

Read through Kurata Momozo's 'Fusetaishi no Nyūzan'.

一月五日 木曜日

明日法事がある、その菓子を半田の饅頭屋へとりに行かうとして家を出たら、榎本が来た。同窓会に行かうと云ふ。招待状は来なかつたので、あるとは知つてゐたが行かないつもりでゐた。が彼がさそひに來たからにはと行つた。佐治と道で一緒になつた。菓子をまづ新田へはこんでから行つたら、はなびらの様に、そろつてゐた。若い連中が多かつた。久米も來てゐた。畑中もすみの方にゐた。きちんとしてゐるので見ちがへた。恒君もちきとなりゐた。さすがによい着物をきてると思つた。声がきらひだ。

久米をつれて來た。夕飯を何かごちそうしてくれると思つたのに、いもしかなかつたのでそれだけをたべてさみしかつた。

生殖細胞や何かの話をして、久米はねて行つた。

一月六日 金曜日

Kume returned without taking breakfast. His poverty made him so prudent.

Brother went on foot, and I went by bicycle to Shinden.

Heard about cranes, lamp, Hinchishi of old times from an old wife of my kindred.

Towards evening, went to bed, feeling side-acke. As I awoke, I recovered.

Though tried to compose a nursery rhyme, yet could not.

一月七日 土曜日

午後遠藤のとこへ行かうと思つてゐたら、便所にはいつてゐたところへ、榎本がきた。くだらない話に時間をつぶすのが、勿体ないから帰してしまはうと思つただけけれど、社会に出てからの為に、我まゝをおさへて、彼と午後中をはなした。みだらな空想にとらはれるのは、童謡のことを思はないからだと思つて、夕方童謡をひねつてゐたら、畑中が、ひよつこり来た。彼は表から、先づ「やい」と声をかけて、畑のあたりで小便をし、それから這入ってくる。名古屋の眼医者からの帰りだと云ふ。英語のことを、*「松崎にたのむんだ、てまえぢやねえ」*と云はれて、ぐつとしゃくにさわり、夜ベーターペンのレコードをきゝに行くのも、あまり気がすまなかつた。ベーターペンに感激してかへつ

て、童謡を一つひねり出した。

一月八日 日曜日

Went to see Endo, because he wrote me, saying that he would be at home after 6th.

Was with him from 2 to 9.30, and was entertained of supper.

Talked about English literature, arts, love, marriage, etc.

A good moonlit night.

一月九日 月曜日

Read through Irving's "Sketch Book".

Went to hand letter to O——. Could do with success. Was discouraged by seeing her unbeautiful face in a sense.

Read through Momozo's 'Chichi no Shinpai'.

When having supper Natsu came to ask me to accompany her sister to Tokyo.

It was chill. I, brother, and mother went to the station, talking of this time the year. And met Miss. C at the station. We came face to face till Ōbu, but after there we must part because the train was crowded. However, about an hour after we joined again. And parted at Tokyo station.

一月十日 火曜日

九時間の怠屈である筈の時間が、Cと話してることによつて愉快にすごすことの出来たのを感謝した。しかし自分は、Cと向ひあつてゐる時、O子にひきつけられたと同じ意味でひきつけられはしなかつたか。只たんに、男性の友人に対する様な気持でゐたであらうか。もしもさうでないならば、自分の今までのO子に対する恋は、その意味を如何にきはくにうすめることであらうか。

午後二時までねた。八通程きてゐたはじめての人々（すべて童謡関係）の年頭状の返しを書いた。夕方、こんど舎監をやめて野方に宅を持った小林氏を、橋爪と訪れた。橋爪は、昨夜洲崎へはじめてのぼつたと云つた。夜は、聖歌の家へみやげを持つて行つて、十時頃かへり、童謡を一ぺんものした。

一月十一日 水曜日

Attended school.

Began to read Durant's 'The tale of Western philosophy'.

Made up mind to go to buy a girl, but abandoned the idea, thinking of O——. Could not help masturbation.

一月十二日 木曜日

童謡を思ふ。

本郷座に藤掛とキネマを見る。女王様御命令。それは、よい映画である。

O子から手紙が来た。恋愛も人と人との関係であれば、この短かい手紙を通して女と接してゐる間にも、うれしいことがあれば、気まづいこともある。

くから持つて来た下駄と山芋を聖歌のところへ持つて行つてやる。

一月十三日 金曜日

セイカ夫人ばかりが家にゐた。とろろ芋がつめたくなるまで待った。セイカのゐない間に、僕がきて飯を食べて行つてしまふことは、セイカは変に思はないか。

詩と詩論の中にならんでゐる文字の内容にふれるには、僕は今から、何年の努力を要するだらうか。僕はさみしいと思はないか。

電気の光線よけの額かけを買つた。これをかけると、鼻の色がこんぶみだいである。足立さんの顔を見ると、花柳病患者である。

童謡の清書をした。

一月十四日 土曜日

I felt that I was left behind classmates.

After school I and Fujikake took a walk at Kagurazaka. Asking policemen to show way twice, we

came to Joshisen. C was talking with two or three friends near school. We took a walk in Gaien, and Fujikake departed there. When we passed in front of Shochikuza, and I said "If you have not yet entered this cinema-palace, I would like to make you see cinema here," she said that she had never seen one there. So we entered. After seeing "Tiger Shark", we took a dinner at a fruit-parlor. It was a few minutes to nine when we parted. I spent more than 2 yen today. I am regretting.

一月十五日 日曜日

Read 'Tale of Western Philosophy'.

Write a letter to give O.

Took a walk in Nakano. And bought a book on nursery rhyme. It is very chill.

一月十六日 月曜日

Read Koda Rohan's 'Haryabutsu'.

It is interesting in the point of mistery.

Began 'Ama utsu nani' of the same author.

Composed a nursery rhyme in bed this morning.

一月十七日 火曜日

去年の改造十一月号の、深田久弥の、あすならう、と広津和郎の、故国、をよんだ。あすならうは、変化のあるストリーではないのだが、描写法が面白いから、ついひきこまれた。

雪がふつた。雨がふつて、雪はとけた。

部屋の中のさむさがきびしいので、勉強は床の中へもち込んでゐる。

寮に怪談があると云ふ。南から三つめの大便所の中で八九年前、寮生が首を縊つたと云ふ。秋田さんが一年にはいつた頃には、血こんがあつたさうだ。それ以後、その扉だけは、よくあいてゐるのだと云ふ。みぞれのしみる宵にきかされた怪談——何かうすきみが悪かつた。